

1. 大学の理念と目標

長岡崇徳大学は長岡を中心とした中越地域市民の医療と福祉を支えてきた「長岡の医療と福祉の里」の新しいメンバーとして設立されました。いわば地域密着型の大学であり、新潟県、長岡市及び周辺市町村の皆様の支援を受けて生まれました。本学の設立を語るとき、長岡藩士・小林虎三郎による教育にまつわる米百俵精神を忘れることができません。ひもじい思いをしても、子弟に教育を受けさせる重要性は、豊かではない時代だけではなく、豊かになった今でも変わらぬ珠玉の魂ではないでしょうか。これは長岡だけの誇りではなく、おそらく勤勉な日本人の芯となっている精神であると信じて疑いません。

長岡崇徳大学の大学名にある「崇徳」には、本学創始者田宮崇の父であり浄願寺住職でもあった麟氏からの薫陶が受け継がれております。崇徳の二文字は、鎌倉時代に法然上人(1133年～1212年)の説いた言葉「崇徳興仁 務修礼讓」の一節に由来しますが、その意味は徳をあげめ仁を尊び、礼節を大切にすることを説いたものです。

この「徳」の概念は、洋の東西を問わず哲学、宗教の中心的課題の一つであり、倫理的、道徳的善に対する意志の恒常的志向性、ないしは善を実現する恒常的能力を意味することから人が求めるべき究極の理想規範ともいえます。徳の重要性については、古くはギリシャの哲学者プラトン(紀元前427年～紀元前347年)が正義、賢明、節制、剛毅の四つの徳をあげ、人間の求めるべき道と考えました。孔子(紀元前552年～紀元前479年)もまた儒教の中で仁、智、礼、信、忠、孝、義などの細目で徳を説いております。

一方、学問や大学の歴史に目を転じますと、哲学、神学が学問の源となることが多いようです。つまり、人間本来の向かうべき崇高な目標として徳が議論されてきたことが分かります。精神の修養によってその身に得たすぐれた品性と定義する場合がありますが、自らの修練によるものであるか否かを問わず身についたものでなければならない絶対的存在としての徳が尊ばれています。その結果、徳 *virtue* の理念追求から、真理 *veritas* を探究する自然な流れで今日の自然科学や人文社会科学が発展してきました。

長岡崇徳大学は、崇徳の理念に基づき、生命の尊厳を基盤とする豊かな人間性を醸成し、自己及び他者への深い洞察力をもって自己成長への志向を育むとともに、基礎的・先進的な知識と技術を教授することにより、多様に変化する人々の健康と福祉のニーズに柔軟に応えうる人材を育成します。

長岡崇徳大学は、看護学を修める教育の場だけではなく人間としての完成度を高める場として、新入生の皆さんがあたたかな心で弱者、病者、障害者に寄り添える豊かな感性を育て、人として成長していくことを望んでいます。ときに時代のパイオニアとして活躍したり、時々刻々変化する医療最先端に対応しながら地域と社会から頼りにされるような唯一無二の人に育てて欲しいと願っています。